

# 《バビロニアのチーロ、またはバルダッサーレの没落》 作品解説

水谷 彰良

初出は2012年7月、ROF初上演に先立ち会員に配布した作品解説ですが、詳細なあらすじと全集版校訂者による楽曲区分を追加した解説を『ロッシニアーナ』(日本ロッシニー協会紀要)第34号(2014年2月)に「ロッシニー全作品事典(26)」として掲載しました。本稿はその書式変更版で、上演記録の誤謬を改めてHPに掲載します。

(2014年3月。5月改訂)

## I-5 バビロニアのチーロ、またはバルダッサーレの没落

### *Ciro in Babilonia o sia La caduta di Baldassare*

**劇区分** 2幕のドランマ・コン・コーリ・ペル・ミュージカ (dramma con cori per musica in due atti)

**台本** フランチェスコ・アヴェンティ (Francesco Aventi, 1779-1858)

第1幕: 全13景、第2幕: 全17景、イタリア語

**原作** 旧約聖書「ダニエル書」第5章

**作曲年** 1812年(1月末~3月14日以前)

**初演** 1812年3月14日(土曜日)、フェッラーラ、コムナーレ劇場 (Teatro Comunale)

**人物** ①バルダッサーレ Baldassare (テノール、a-b<sup>2</sup>) ……バビロニアのアッシリア人たちの王

②チーロ *Ciro* (コントラルト、a b<sup>2</sup>-b b<sup>2</sup>) ……ペルシアの王

③アミーラ *Amira* (ソプラノ、c<sup>2</sup>-c<sup>3</sup>) ……チーロの妻、バルダッサーレの捕虜

④アルジェーネ *Argene* (ソプラノ、e b<sup>2</sup>-g b<sup>2</sup>) ……アミーラの友人

⑤ザンブリ *Zambri* (バス、F-f<sup>2</sup>) ……バビロニアの王子

⑥アルバーチェ *Arbace* (テノール、c<sup>2</sup>-c<sup>3</sup>) ……バルダッサーレ軍の隊長

⑦ダニエッロ *Daniello* (バス、A-e<sup>2</sup>) ……預言者ダニエル

他に、子供(チーロの息子カンビーゼ *Cambise*。黙役)、王国の有力者と兵士たち

**初演者** ①エリオドーロ・ビアンキ (Eliodoro Bianchi, 1773-1848)

②マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780頃?)

③エリザベッタ・マンフレディーニ (Elisabetta Manfredini, 1780?)

④アンナ・サヴィネッリ (Anna Savinelli, ?-?)

⑤ジョヴァンニ・ライネル (Giovanni Layner, ?-?)

⑥フランチェスコ・サヴィネッリ (Francesco Savinelli, ?-?)

⑦ジョヴァンニ・フラスキ (Giovanni Fraschi, ?-?)

**管弦楽** (全集版未出版のため複数の典拠から暫定的に記載)

1ピッコロ、2フルート、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、2ホルン、2トランペット、

1トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

**演奏時間** 序曲: 約6分、第1幕: 約55分、第2幕: 約75分

**自筆楽譜** 不明(未発見)

**初版楽譜** Giovanni Ricordi, Milano, 1852. (ピアノ伴奏譜)

**全集版** I/5 (未出版。Daniele Carnini / Ilaria Narici 校訂, Fondazione Rossini Pesaro)

**構成** (自筆楽譜の消失と全集版未出版のため、2012年ロッシニー・オペラ・フェスティバルのプログラムと批判校訂版の第一次校訂譜を参照して作成。異同はROFプログラムを採用)

序曲 [Sinfonia]: ニ長調、3/4拍子、アンダンティーノ~4/4拍子、アレグロ・スピリトーズ

註: 前作《幸せな間違い》序曲の転用。

### 【第1幕】

N.1 導入曲〈バビロニアの民は *Di Babilonia i popoli*〉(合唱、ザンブリ、バルダッサーレ)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈称えるのだ、友よ *Plaudite, amici*〉(ザンブリ、バルダッサーレ、アミーラ)

- N.2 バルダッサーレとアミーラの二重唱〈余に従え、いまやわしの思うままなのだ *T'arrendi, alfin dipende*〉(バルダッサーレ、アミーラ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈もうお前の拒絶にはうんざりだ *Stanco di tue repulse alfin son io*〉(バルダッサーレ、アミーラ、アルジェーネ、アルバーチェ)
- N.3 チーロ登場のカヴァティーナ〈見ろよ、なんと蒼ざめ – 不幸なチーロ! – ああ! 私の苦しみは、どうすれば *Veh come pallido – Ciro infelice! – Ahi! Come il mio dolore*〉(合唱、チーロ)
- カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈もはや忠実な者はおらず *Non più miei fidi*〉(チーロ、アルバーチェ)
- N.4 アルバーチェのアリア〈あなたも復讐してください *Opra la tua vendetta*〉(アルバーチェ)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈お前も聞かだろ。だが、あのひどい対立は *T'ascolterò: ma qual crudel contrasto*〉(チーロ、アルバーチェ、バルダッサーレ、ザンブリ、アミーラ)
- N.5 伴奏付きレチタティーヴォ [Recitativo strumentato] とアミーラのアリア〈遅いですって?…ああ! お願いです – 夫に会いたい *Che tardi?... Deh! Per pietà – Vorrei veder lo sposo*〉(アミーラ、合唱)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈わしの顔…わしの居ることが *L'aspetto mio... la mia presenza vedo*〉(バルダッサーレ、チーロ、ザンブリ、アミーラ)
- N.6 四重唱フィナーレ〈衛兵たち、さあ! *Guardie. Olà!*〉(バルダッサーレ、ザンブリ、チーロ、アミーラ、合唱)
- 【第2幕】**
- N.7 第2幕の導入合唱〈美しい魂を助けに来てください *Si bell'alma soccorrete*〉(合唱)
- 導入合唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、お願いします、いらしてください! *Deh vieni per pietà!*〉(アルジェーネ、アルバーチェ)
- N.8 シェーナと三重唱〈事実ならば – おまえをこの胸に抱けば – 心に激しい恐怖が起きる *Dunque fia ver – Nello stringerti al mio petto – Fiero nell'anima*〉(チーロ、アルバーチェ、アミーラ、バルダッサーレ)
- 三重唱の後のレチタティーヴォ〈アルジェーネ、聞いたか? *Udisti Argene?*〉(ザンブリ、アルジェーネ)
- N.9 合唱 – [嵐 (Temporale) – 預言 (Profezia)]、シェーナとバルダッサーレのアリア
- N.9-i 合唱〈周囲にアラブの香を焚き *Intorno fumino gli arabi odori*〉(合唱)
  - N.9-ii 合唱の後のレチタティーヴォ〈誰もが余と共に楽しみ *Meco s'allegri ognun*〉(バルダッサーレ)
  - N.9-iii 二つ目の合唱〈楽しげな音で *In tuon festevole*〉(合唱)
  - N.9-iv 二つ目の合唱の後のレチタティーヴォ〈ザンブリ、これが壺だ *Son questi, o Zambri*〉(バルダッサーレ、ザンブリ)
  - N.9-v 嵐 [Temporale]〈暗い恐怖がわしに襲いかかる! *Qual tetro orror m'assale!*〉(バルダッサーレ)
  - N.9-vi レチタティーヴォと預言 [Profezia]〈お前は誰だ *E tu chi sei*〉(バルダッサーレ、ダニエッロ)
  - N.9の続き [N.9-vii] レチタティーヴォとバルダッサーレのアリア〈不幸な私、なんとという言葉 – なんと過酷で、なんと悲しい運命 *Misero me che intesi – Qual crudel, qual trista sorte*〉(バルダッサーレ、合唱)
  - アリアの後のレチタティーヴォ〈お行きなさい、残酷な人よ *Va' pur crudele*〉(ダニエッロ)
- N.10 ダニエッロのアリア〈敵の剣も松明も *De' nemici le spade, le faci*〉(ダニエッロ)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈お許してください、ああ、王女さま *Perdona, o Principessa*〉(アルバーチェ、アミーラ、アルジェーネ)
- N.11 アミーラのアリア〈ああ! わたしのために苦しまないで *Deh! per me non v'affliggete*〉(アミーラ)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈神々の激しい怒りが *Troppo l'ira de' Numi*〉(ザンブリ、アルジェーネ)
- N.12 アルジェーネのアリア〈不幸を軽蔑する人は *Chi disprezza gl'infelici*〉(アルジェーネ)
- N.13 チーロのグラン・シェーナ
- N.13-i 合唱〈今日、怒れる神々が *Dunque in oggi i Numi irati*〉(合唱)
  - N.13-ii 伴奏付きレチタティーヴォとチーロのアリア〈ああ、私の苦痛 – お前を抱き、お前を抱き締めよう *Oh delle mie pene – T'abbraccio, ti stringo*〉(チーロ、バルダッサーレ、アミーラ、アルジェーネ、アルバーチェ、ザンブリ、合唱)
  - チーロのグラン・シェーナの後のレチタティーヴォ〈恐ろしい虐殺の結末が待っている *Abbia fine l'atraghe*〉(ザンブリ、チーロ、アルジェーネ、アミーラ、アルバーチェ)
- N.14 第2幕フィナーレ〈慈悲深き勝者に *Al vincitor clemente*〉(合唱、チーロ、アミーラ、ザンブリ)

## 物語

### 【第1幕】

バルダッサーレの王宮。ペルシアとの戦いに勝利したバビロニアのアッシリア人の王バルダッサーレを称える合唱が歌われる。バビロニアの王子ザンブリが、バルダッサーレがペルシア王チーロの妻アミーラとその息子を捕虜にし、アミーラを王妃に望んでいると話す (N.1 導入曲)。バルダッサーレはアミーラに妻となるよう求めて拒まれると、お前の運命は私の手の中にある。愛を拒否すれば死あるのみ、と言って恫喝する。だがアミーラは「名誉を守るためなら死を選びます」と答え、バルダッサーレは怒りを募らせる (N.2 バルダッサーレとアミーラの二重唱)。バルダッサーレがなおも自分との結婚を命じて去ると、アミーラの侍女アルジェーネは面識のあるバルダッサーレ軍の隊長アルバーチェに助けを求め、ペルシア生まれで彼女に思いを寄せるアルバーチェは協力を約束する。

バビロニアの城壁の外。チーロは妻と息子の喪失を嘆き、運命を呪いながらも復讐を誓い、武器をとって戦うべく兵士たちを鼓舞する (N.3 チーロ登場のカヴァティーナ)。そこにアルバーチェが現れ、チーロへの協力を申し出る (N.4 アルバーチェのアリア)。

王宮の大広間。チーロは妻を救うべくアッシリア特使に変装してバルダッサーレのもとを訪れ、チーロの妻と息子の引き渡しを条件に和平を申し出る。そしてアミーラの解放を拒まれると、自分が彼女を説得すると言って面会を求める。そこに呼ばれたアミーラは夫を見て驚くが、チーロは使者と偽ってその場を取り繕う。戸惑うアミーラは、夫に会いたいと訴え、おのれの不幸を嘆き悲しむ (N.5 伴奏付きレチタティーヴォとアミーラのアリア)。バルダッサーレは彼らを二人きりにして隠れて様子を見守る。それに気付いたチーロはアミーラにバルダッサーレとの結婚を促すが、アミーラは彼を夫と認めて名前を呼んでしまう。それを聞いたバルダッサーレは使者がチーロであると確信し、アミーラが愛を受け入れればお前を助けると言うが、アミーラはこれを拒否し、一同の感情のもつれあいと混乱で幕を閉じる (N.6 四重唱フィナーレ)。

## 【第2幕】

バルダッサーレの王宮。人々がアミーラに同情している (N.7 第2幕の導入合唱)。アルジェーネに嘆願されたアルバーチェは、アミーラが牢獄のチーロと会えるようにすると約束する。

地下牢では、鎖に繋がれたチーロが絶望しながらも、バルダッサーレに勝利したらヘブライ人を解放すると神に誓う。そこにアルバーチェに導かれたアミーラが現れる。二人は再会を喜び、愛を確かめ合う。だが、そこに衛兵を連れてバルダッサーレが来て怒りを爆発させ、チーロに死を言い渡してアミーラを夫から引き離す (N.8 シェーナと三重唱)。

夜。豪華に飾られた宴会の大広間。バルダッサーレの勝利を祝って宴会が行われる。バルダッサーレが勝利の美酒に酔っていると不意に嵐が起り、不思議な手が壁に謎の文字、**Mane, Thecel, Phares** [註] を書く。恐怖にかられたバルダッサーレがその意味を解かせようと考えていると、預言者ダニエッロが現れ、バルダッサーレの死とバビロニアの消滅と読み解く。後悔の念にさいなまれたバルダッサーレは自分の運命を嘆くが、僧侶たちからチーロとその妻子を生贄にするよう進言されるとアミーラを諦め、彼らを生贄にしようと決める (N.9 合唱 - [嵐 - 預言]、シェーナとバルダッサーレのアリア)。だが預言者ダニエッロは、王はもはや運命を逃れることはできぬと独語する (N.10 ダニエッロのアリア)。一方、死刑を告げられたアミーラは死を覚悟しながらも夫と息子の身を案じ、神に二人を守るよう祈る (N.11 アミーラのアリア)。ザンブリにとりなしを頼んで拒否されたアルジェーネは、「薄情な人間は神に罰せられる」と歌う (N.12 アルジェーネのアリア)。

バビロニアの大きな広場。処刑の準備が整い、人々は同情を禁じ得ない。チーロは死を恐れぬと言いながらも妻と息子を見て涙し、息子を抱き締める。そして暴君は天に復讐されるとバルダッサーレを非難し、妻と息子に二人の魂は至福を受けると語りかける (N.13 チーロのグラン・シェーナ)。だがアルバーチェの率いる軍の反乱でペルシア軍がバビロニアを制圧、救出されたチーロとアミーラが喜びを分かち合う (N.14 第2幕フィナーレ)。

註：旧約聖書の共同訳では、「メネは数える」「テケルは量を計る」「パルシンは分ける」とされる。

## 解説

### 【作品の成立】

1812年1月8日にヴェネツィアのサン・モイゼ劇場で《幸せな間違い》を初演したロッシーニが、いつフェッラーラに移動したのか不明であるが、1月末もしくは2月初めには新作オペラを準備すべく移っていたものと思われる。フェッラーラのコムナーレ劇場との新作契約に関するドキュメントは現存せず、作品を委嘱された経緯も詳らかでないが、ロッシーニの作曲する2幕の合唱付き音楽劇(ドラマ・コン・コーリ・ムジカ)《バビロニアのチーロ、またはバルダッサーレの没落 (*Ciro in Babilonia, ossia La caduta di Baldassare*)》の台本作者となったフランチェスコ・アヴェンティ (Francesco Aveni, 1779-1858) を通じて作曲を依頼されたと推測されている<sup>1</sup>。

アヴェンティはナポレオン支配下で国軍司令官を務めたフェッラーラ有数の貴族で、ロッシーニが同地でマエ

ストロ・アル・チェンバロを務めた 1809～10 年の謝肉祭に面識を得ていたと考えられるのである。だが別な可能性もある。それがこのオペラで主役チーロを歌うマリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780 頃?)。彼女は《ひどい誤解》の初演で主役を務め、ロッシーニは彼女の出演する他のオペラの稽古もつけ、差し替えアリアを作曲するなど親しい関係にあったのである。それゆえマルコリーニがロッシーニの才能を高く評価し、フェッラーラで新作を書かせるよう興行師に売込んだ、との可能性も捨てきれない<sup>2</sup>。

フェッラーラのコムナーレ劇場 (Teatro Comunale) は、1798 年 9 月 2 日に M.A.ポルトガッロ作曲《オラーツィとクリアーツィ (Gli Orazi e i Curiazi)》で開場したオペラハウスである。ロッシーニが四旬節 (Quaresima 復活祭前の 40 日間) 用に求められたのは、旧約聖書に題材を求めた聖劇 (ドラマ・サークロ *dramma sacro*) である。このジャンルはオラトリオとも称されるが、実質的には衣装と装置を伴う舞台形式の宗教オペラ (オペラ・サークラ *opera sacra*。宗教的題材のオペラ・セーリアに該当) で、四旬節に聖劇を上演する伝統は 18 世紀末に始まり、フランス軍によるイタリア支配の間に定着していた。台本作家アヴェンティは旧約聖書の「ダニエル書」第 5 章に題材を求め、次の物語を構成した。

**第 1 幕** ペルシア王チーロに勝利したバビロニアのアッシリア人の王バルダッサーレは、捕虜にしたチーロの妻アミーラを娶ってバビロニアを手中に収めようと企てる。チーロは妻を救うべくアッシリア特使に変装し、バルダッサーレと対面して人質釈放を求めるが、正体がばれて捕らわれ、死刑を命じられる。

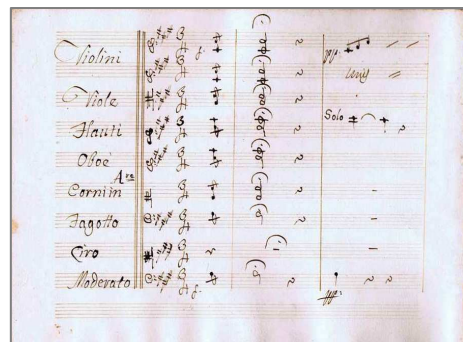
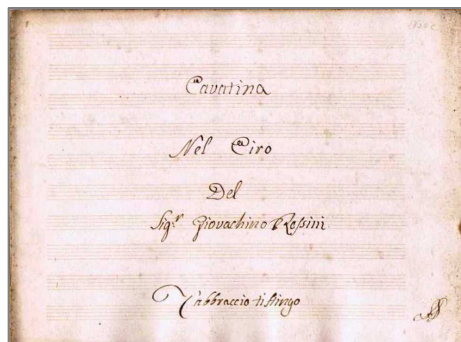
**第 2 幕** 地下牢に幽閉されたチーロは、バルダッサーレに勝利したらヘブライ人を解放すると神に約束する。祝宴でバルダッサーレが勝利の美酒に酔っていると不意に嵐が起り、不思議な手が壁に謎の文字を記す。預言者ダニエーレはバルダッサーレの死とバビロニア没落の暗示と読み解くが、バルダッサーレはチーロとその妻子を生贄にするよう命じる。だがアルパーチェ率いる軍が反乱を起こし、攻め込んだペルシア軍がチーロを救出してバビロニアを制圧する。

バルダッサーレは史実の新バビロニア王ベルシャザル (日本語の聖書 [プロテスタントとカトリック新共同訳] ではベルシャツァル)、チーロはペルシア王キュロス [2 世] (紀元前 600 頃-紀元前 529) であるが、「ダニエル書」の記述と史実の間には違いがある。ロッシーニは 2 月 18 日に母に宛てた手紙の中で、「ぼくのオラトリオは順調で、これまで書いた曲はみな美しく、歌手たちにすごく好まれています。ここでぼくが愛されている間に、上演されて成功するよう願っています<sup>3</sup>と記したが、以後 3 月 14 日に初演を迎えるまでのドキュメントは残されていない。

## 【特色】

自筆楽譜を消失したため正確な楽曲区分とナンバー数は確定しないものの、序曲 (シンフォニア) は前作《幸せな間違い》序曲の転用で、他にも旧作からの転用や素材の借用がある (後述)。題名役のチーロは男装を好んだマルコリーニのために書かれ、登場のシェーナとカヴァティーナ (ああ! 私の苦しみは、どうすれば (*Ahi! come il mio dolore*)) (第 3 曲) は合唱に続いて印象的な開始部を持ち、カバレッタに力強い用法が見られる。第 2 幕チーロのアリア (お前を抱き、お前を抱き締めよう (*T'abbraccio, ti stringo*)) (第 13 曲) グラン・シェーナに含まれる) は、シェーナ、カンタービレ、テンポ・ディ・メツォ、合唱付きカバレッタからなるが、そこで終わらずドラマに沿って第二のシェーナを挟んで新たな合唱付きカバレッタを設けて異例の拡大形式となっている。ここで留意したいのは、本作がカストラートを主役とした前世紀末のオペラ・セーリアの流れを汲み、フランス革命後のイタリアでカストラートを男装低声女性歌手の「プリモ・ウオーモ (註: 女性歌手でありながらこのように位置づけられた)」に置き換え、ヒロインを歌う女性ソプラノのプリマ・ドンナと共に 2 人の主役とする点で、前時代的な様式の延長上にあると言える。

第 2 幕チーロのアリア (お前を抱き、お前を抱き締めよう) の総譜手写譜 (1820 年頃。筆者所蔵)



それゆえアミーラに、チーロと対等もしくはそれ以上に魅力的なアリアがある。第1幕のアリア〈夫に会いたい (*Vorrei veder lo sposo*)〉(第5曲)は、《幸せな間違い》イザベッラのアリア(第6曲)のカバレッタの転用改作を軸にカンタービレの旋律を新たに作曲した名曲で、後に《エジプトのモゼ》第2幕アマルテアのアリア(第7曲)に転用される<sup>4</sup>。技巧的な独奏ヴァイオリンのオブリガートを伴う第2幕のアリア〈ああ！わたしのために苦しまないで (*Deh! per me non v'affliggete*)〉(第11曲)も異彩を放つ(カバレッタ末尾のパッセージは《ひどい誤解》に前例があり)。初演歌手エリザベッタ・マンフレディーニ(Elisabetta Manfredini, 1780-?)はロッシーニが指揮した1811年のハイドン《四季 (*Die Jahreszeiten*)》のソリストを務め、後に《シジスモンド》アルディミーラと《ブルグントのアデライデ》タイトルロールを創唱する優れたソプラノである。



テノールはバルダッサレ役とアルバーチェ役で、第2幕バルダッサレのアリア〈なんと過酷で、なんと悲しい運命 (*Qual crudel, qual trista sorte*)〉は難技巧を駆使する規模の大きな楽曲である(中間部の合唱に、後の《アルジェのイタリア女》の片鱗が聴き取れる)。第1幕アルバーチェのアリアも短いながら秀逸で、緻密な伴奏音型に加えてハイC(記エリザベッタ・マンフレディーニ譜上のc<sup>m</sup>)も使われる。

さまざまな独奏楽器のオブリガートを用いる管弦楽法も多彩。第2幕牢獄の場における管弦楽の緊迫感のある前奏とチーロのシェーナ〈事実ならば (*Dunque fia ver*)〉(第8曲)も秀逸である。同じナンバーの二重唱(〈おまえをこの胸に抱けば *Nello stringerti al mio petto*)〉の前奏には1810年に作曲した《デメトリオとポリーピオ》リジンガとシヴェーノの小二重唱の片鱗が聴き取れ、第1幕の四重唱フィナーレ〈衛兵たち、さあ！ (*Guardie. Olà!*)〉(第6曲)、アルジェーネのアリア(第12曲)、チーロのアリア(第13曲)にも《デメトリオとポリーピオ》の一部が聴き取れる。合唱曲は第1幕の〈見ろよ、なんと蒼ざめ (*Veh come pallido*)〉が《ひどい誤解》エルネステイーナのカヴァティーナ(第4曲)の合唱、第2幕饗宴の合唱〈周囲にアラブの香を焚き (*Intorno fumino gli arabi odori*)〉(第9-i曲)は同じオペラの第2幕導入曲の合唱(第11曲)の転用である。

饗宴の合唱に続く短い嵐の音楽(Temporale)は劇的展開と結びついたもので、チーロのアリアに先立つ木管・金管アンサンブルの葬送音楽を用いた合唱〈今日、怒れる神々が (*Dunque in oggi i nume irati*)〉も効果的に使われる(ロッシーニのオペラにおける嵐の音楽と葬送音楽はこの《バビロニアのチーロ》が最初)。とはいえ劇としての見せ場におけるドラマティックな展開に欠け、謎の手が壁に文字を記すシーンなど後のロッシーニであれば違うアプローチをいただろう。それでも最初のオペラ・セーリアとしてはどの音楽も高く評価すべき水準にあり、20歳になるかならぬかの年齢での作曲を考慮すれば、その早熟にして多彩な才能に驚くほかない。

本作ならではのユニークな着想は、旋律にたった一つの変口音だけを用いるアルジェーネのアリア〈不幸を軽蔑する人は (*Chi disprezza gl'infelici*)〉である。これを取り入れた理由を、後年ロッシーニはこう述べた——「《バビロニアのチーロ》には、ひどいセコンダ・ドンナがいたんだ。彼女はものすごく不器量な上に、声も最悪だった。それで慎重に試したところ、たった一つひどくない音を持っているのが判った。それが中音域の変口音。それでぼくは彼女のために、その音以外は歌う必要がないようアリアを書いたのだ。音楽的なことは全部管弦楽に委ねてね。そしたらその曲が喜ばれ、喝采されたから、ぼくの“モノトーン”歌手は大成功して最高に幸せだったよ」<sup>5</sup>。

同じ会話でロッシーニは《バビロニアのチーロ》を「失敗作の一つ」と述べているが<sup>6</sup>、その言葉とは裏腹に、3月14日にコムナーレ劇場で行われた初演は成功だったことが新聞批評から明らかになる——「[去る14日、土曜日の上演は]劇の作家、音楽の作曲者、役者たちと主催者の努力により、とても幸せな結果に終わった。[中略]音楽を書いたロッシーニ氏は、一曲ごとに繰り返し拍手喝采を送られる栄に浴した。[中略]この若きマエストロは、その音楽的才能において観客に素晴らしい希望を与えてくれる」(『ジョルナーレ・デル・ディパルティメント・デル・レーノ (*Giornale del Dipartimento del Reno*)』1812年3月17日付)<sup>7</sup>。ロッシーニ自身も母に宛てた手紙に「ぼくのおラトリオの結果がすごく良かったのを知るでしょう」と書き、15スクード送金する旨を記している(1812年3月24日付)<sup>8</sup>。

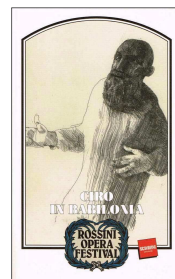
## 【上演史】

前記のように、3月14日にコムナーレ劇場で行われた《バビロニアのチーロ》の初演は成功を収めたが、初演年の再演は行われず、1813年3月のマントヴァ(レージョ劇場)とフィレンツェ(ペルゴラ劇場)、1815年3月ミラーノ(私設劇場におけるアマチュア上演)、1816年2月フィレンツェ、3月ヴェネツィア、四旬節のサン・ルーカ(ヴェンドラミン劇場)と続き、1817年にパドヴァとボローニャ(アポストロニコ宮殿)、1818年はミラーノ(スカラ座)、リヴォルノ(アヴヴァローラティ劇場)、モデナ(サーラ・デッレ・ベッレ及びコムナーレ劇場)、ボローニャ(コ



ルソ劇場)で上演をみた。しかし、1820年代はヴェローナ、ブレーシャ、フェッラーラ、ローマ、パドヴァのみで、1832年9月のペルージャ(ミネルヴァ劇場)を最後に忘れられた。国外での上演は1816年10月27日のミュンヘン宮廷劇場を皮切りに、1819年3月20日ヴァイマル宮廷劇場、1822年10月2日ドレスデンと続き、1823年1月30日にはロンドンのドルリー・レーン劇場で演奏会形式により上演されている<sup>9</sup>。

再演の少なさは、ロッシーニのオペラ・セーリアの次作《タンクレーディ》が広く流布しただけでなく、《バビロニアのチーロ》の台本が劇的構成の点で弱かったことも原因のようだ。1816年のサン・ルーカ劇場上演の批評もその点を捉え、「《チーロ》の台本は、素人[ディレタント]の作品である」と批判している(『ガゼッタ・プリヴィレジャータ・ディ・ヴェネツィア (*Gazzetta Privilegiata di Venezia*)』1816年3月1日付)<sup>10</sup>。復活上演は1988年10月にサヴォーナのキアブレラ劇場で行われ、2004年7月にはパート・ヴィルトバートのロッシーニ音楽祭にて手写譜に基づく新版を用いた上演が行われた。ロッシーニ財団の第一次校訂譜は2012年7月にキャラモア・ベル・カント音楽祭(Bel Canto at Caramoor)で先行使用され、続く8月ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演はそのプロダクションのペーザロ・ヴァージョンに相当する(演出:ダヴィデ・リヴェルモレ、指揮:ウィル・クラッチフィールド、チーロ:エヴァ・ポドレシュ、アミーラ:ジェシカ・プラット、バルダッサーレ:マイケル・スパイレス[スパイヤーズ])。ペーザロ上演は、エヴァ・ポドレシュの圧倒的歌唱と存在感、映画と舞台を合体させた演出家ダヴィデ・リヴェルモレの卓抜な手腕で大成功を収めた。なお《バビロニアのチーロ》の自筆楽譜は未発見のため、第一次校訂譜は現存する初期の手写譜の比較研究により作成されている。



2012年ROF  
プログラム

#### 推薦ディスク

・2012年8月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演(Opus Arte OA1108D[DVD]、OABD 7123D[BD] 海外盤)

ダヴィデ・リヴェルモレ(演出) ウィル・クラッチフィールド指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団 チーロ:エヴァ・ポドレシュ、アミーラ:ジェシカ・プラット、バルダッサーレ:マイケル・スパイレス[スパイヤーズ]、ザンプリ:ミルコ・パラッツィほか



- <sup>1</sup> Eduardo Rescigno., *Dizionario rossiniano*., Biblioteca universale Rizzoli, Milano, 2002., p.535. 批判校訂版の2人の校訂者も2012年ROFプログラムの論考で同様の推測をしている。
- <sup>2</sup> ロッシーニとマルコリーニが恋愛関係にあったとする伝記作家もいるが、確証はない。しかし、《バビロニアのチーロ》に続いて《試金石》《アルジェのイタリア女》《ジジスモンド》の初演歌手となるなど、ロッシーニとの深い信頼関係があったのは間違いない。
- <sup>3</sup> Gioachino Rossini *Lettere e documenti*., vol. IIIa *Lettere ai genitori* (a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni), Fondazione Rossini, Pesaro, 2004., p.4. [書簡 IIIa 1]
- <sup>4</sup> 全集版《エジプトのモゼ》の序文 p.XLIX で原曲となるアミーラのアリアのインチビトが「Ah! che spiegar non posso」とされているのは明らかに誤り。
- <sup>5</sup> Ferdinand Hiller., *Plaudereien mit Rossini*., Kölnische Zeitung., 22-30/10/1855. [a cura di Guido Johannes Joerg]., *Gli scritti rossiniani di Ferdinando Hiller* (in *Bollettino del centro rossiniano di studi*, Anno XXXII, Fondazione Rossini, Pesaro, 1992.), p.101. のイタリア語訳より重訳。
- <sup>6</sup> Ibid.
- <sup>7</sup> *Lettere e documenti IIIa*., p.7., n.11. 及び Rescigno, op.cit., p.535.
- <sup>8</sup> Ibid., pp.6-9. (書簡 IIIa.2)
- <sup>9</sup> 国外での上演記録は Alfred Loewenberg., *Annals of Opera 1597-1940*., Societas Bibliographica, Genève, 1955., p.625. に劇場名を補足したが、同書に挙げられている1817年6月18日ウィーンのアン・デア・ヴィーン劇場は同劇場の上演記録に無く、除外した。なお、ミュンヘンでの上演を1816年11月6日とする文献もある。
- <sup>10</sup> Rescigno., p.535.